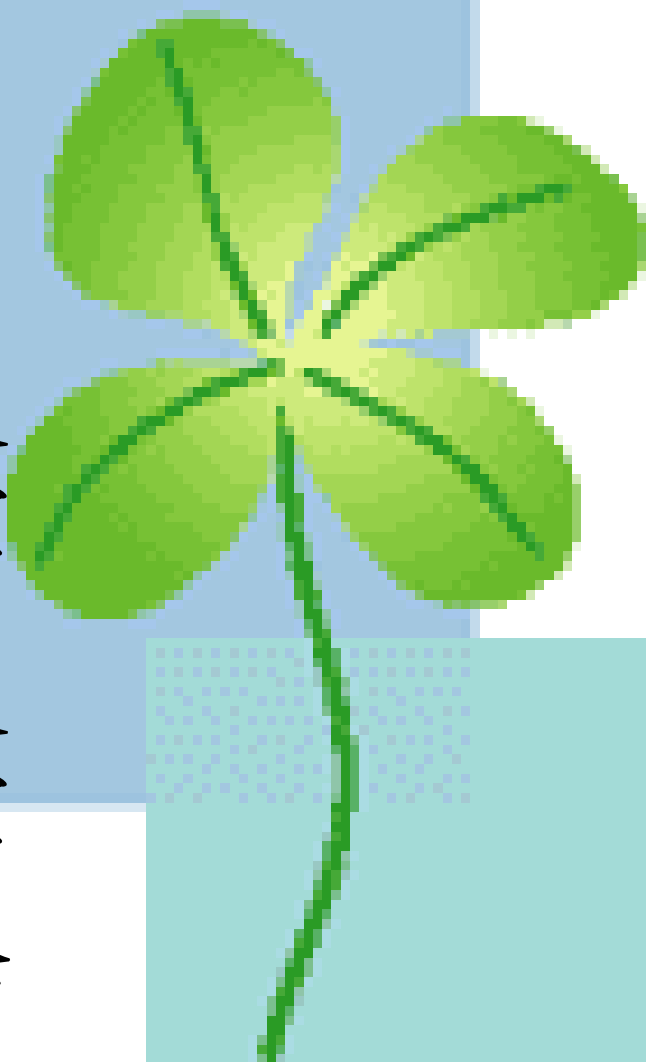




第二十七回夕暮祭短歌大会作品集

秦野市・秦野市教育委員会



第27回夕暮祭短歌大会表彰式及び講演会次第

平成26年5月24日(土) 午後1時30分から
秦野市立図書館視聴覚室

1 開 会

2 秦野市教育委員会教育長あいさつ

3 表彰式

(1) 入賞歌の発表ならびに講評

(2) 表彰

秦野市長賞

秦野市教育委員会教育長賞

秦野市立図書館長賞

村岡嘉子選者賞

山田吉郎選者賞

佳作

— 休憩(10分間) —

4 講演「近代の秀歌をよむ」 村岡嘉子先生

5 秦野短歌会会長あいさつ

6 閉 会

第二十七回夕暮祭短歌大会作品集

ごあいさつ

第二十七回夕暮祭短歌大会作品集をお届けいたします。

入賞されました皆様、誠におめでとうございます。また、ご投稿いただきました皆様方には、厚くお礼を申し上げます。

本市では、郷土の歌人である前田夕暮(まえだゆうぐれ)や谷 鼎(たにかなえ)の文学遺産を永く受け継いでゆくために子どもから大人までが共に参加でき、郷土愛を育むことのできる「短歌のふるさとづくり(歌人の里づくり)」事業を推進し「夕暮祭短歌大会」や「夕暮記念こども短歌大会」などを開催させていただいております。

さて今年度は、全国各地の短歌愛好者の皆様方、九歳から百歳までの幅広い年齢層の三百八人も多くの方々から力作をお寄せいただきました。その中に本大会で初めてとなる海外からのご投稿も含まれておりましたことは、うれしい驚きでありました。

今年度も選者をお願いいたしました村岡嘉子先生、山田吉郎先生におかれましては、そうした数多くの力作の中から大変素晴らしい作品を選考していただきました。ありがとうございます。

今回の大会が、夕暮の近代短歌史における業績を広く紹介する契機となり、ひいては短歌文芸の一層の発展・隆盛を促すこととなりますよう心より祈念いたしております。

本市といたしましては、今後とも「短歌のふるさとづくり(歌人の里づくり)」事業を推進してまいります。皆様方におかれましては、引き続き「夕暮祭短歌大会」をご支援くださいますようお願い申し上げます。

秦野市教育委員会教育長 内田賢司

選者紹介

村岡 嘉子（むらおか よしこ）

歌人、「韻（いん）」編集・発行人、現代歌人協会会員

歌集『雪原にて』『呼びあふ声』『青樹』ほか

著書『金の向日葵―前田夕暮の生涯―』『増補改訂版 夕暮歌碑めぐり』『前田夕暮ふるさとのうた

（上・下）』『前田夕暮百首』（山田吉郎氏と共編）ほか

東京都文京区在住

山田 吉郎（やまだ よしろう）

歌人、「ぷりずむ」選者、鶴見大学短期大学部教授、文学博士、現代歌人協会会員

歌集『蝶の記憶』『実朝塚の秋』『猫坂物語』

著書『前田夕暮研究―受容と創造―』『丹沢の文学往還記』『前田夕暮百首』（村岡嘉子氏と共編）『朔

北の雲―波多野義重と実朝・道元』ほか

神奈川県秦野市在住

入賞作品

秦野市長賞

羽搏いて飛び立つ如し春キャベツ生き生きとして厨辺にあり

神奈川県秦野市 細谷 幸子

みずみずしくいかにも柔らかかそうな若緑の外側の葉を広げたキャベツを「羽搏いて飛び立つ如し」と春空に憧れて飛び立とうとしている鳥のようだと喩えている。春への期待感と歓びは古来から歌われ名歌も多いが、厨辺へくりやべー台所から生命の萌え出る季節への想いがいきいきと生彩豊かに歌われている。(村岡)

秦野市教育委員会教育長賞

廃校の体育館に灯がともり牛飼ひ集ひバドミントンする

北海道札幌市 藤林 正則

廃校になつた体育館がひそやかな雰囲気をただよわせ、一日仕事を終えた牛飼ひたちがささやかな集いをもつ情景が目には浮かぶようである。羽のついたシャトルコックを打ち合いながら、ひとときをすくすく人々の生活感がにじみ出ている。学校が廃校となつたこの土地のさびしさも感じられ、ともる灯を取り巻く夜の闇の静けさが心に沁みる佳作である。(山田)

秦野市立図書館長賞

口笛を吹けば駆け出す馬の背にこぼれる春の光を見たり

神奈川県厚木市 北村 純一

うららかに注ぐ春の陽光のもと、合図の口笛に四肢を弾ませて駆け出す若駒。人と馬との親愛感と躍動感がうららかな春の光のシャワーのもとでさらに鮮明になり、印象派の絵画にも似て心を潤わせる。(村岡)

村岡嘉子選者賞

鯉のぼり舳先に立てる診療船船長室に赤子寝てゐる

神奈川県小田原市 藤田 顕英

この「赤子」は誰の赤ちゃんなのだろう。「診療船」というのは港々を巡つて急患を病院に運んだり、途中応急処置を施したりする船と思われるが、舳先に鯉のぼりをひるがえして春の海を航くという光景から、この「赤子」は急患などではないことを祈りたい。(村岡)

山田吉郎選者賞

貧しさが澄むまづしさでありし日のお地藏さまの笠に積む雪

秋田県秋田市 渡辺 夏子

雪がしんしんと降る静けさの中で、貧しさの意味に思いをひそめる作者の息づかいがおのずと伝わってくる。一首のしらべがととのい、現代社会の中で報じられる貧困と、古い昔話の中で語られた貧しさを対比させながら、読者を静かに郷愁へとさそうようである。窓辺に降る雪がいつしか昔話の中に降る雪と重なり合う静謐をたたえた一首である。(山田)

佳作

子と登り夫とのぼりし阿夫利嶺をすつぼりと入れ秋の虹たつ

神奈川県厚木市 関野 喜代子

阿夫利嶺のふもとに生活し、子と登り、夫と登った思い出をひもときながら、自らの人生をふり返る感慨がにじみ出た一首。（山田）

夕暮の写真の面輪父に似て明治の男の気骨醸しぬ

神奈川県秦野市 新名 安佐子

若いころの夕暮は母似の美青年だったが「文学で身を立てよう」という気概を秘めていたことを写真から感受し、その面差しが自分の父に似通うものがある、と親しみと頼もしさを感じ取っている。（村岡）

木枯しの裸木ゆするこの夕べ丹沢山塊くろぐろと見ゆ

神奈川県横浜市 萩原 伸

葉を落とし、骨のように見える木々の梢を鳴らして寒風が吹き荒れているが、その彼方には丹沢山塊がひととき黒く研ぎ澄まされて聳えている。自然も人も春を待ち侘びているのだと歌っている。（村岡）

肩にのせポーズを決める親子づれ冬日の空が縦に伸びけり

神奈川県秦野市 草刈 敏文

子を肩に乗せ、写真のポーズをきめているのだろうか。生きるよろこびの中で空が縦に伸びたという表現がユニークである。(山田)

本を読む君の横顔に恋の蝶ふわりと留まり羽を休める

神奈川県秦野市 山口 早春

すてきな君。一心に読書している横顔ときたらもう……。そつとこの想いを打ち明けたくて、かわいい蝶になつて君の傍らへ寄り添つてゆきたい……。みずみずしい相聞歌。

(村岡)

今日もまたみずみずしい豆もぎとつた母もこうして暮していたのか

オーストラリア 高山 昭子

みずみずしい豆をもぎとるといふ、ささやかな生活感をうたいながら、下の句で遠き日の母の生活風景と重ね合わせたところが印象深い。(山田)

鉄棒で逆上りする幼な児を見守る父と春の夜の月

神奈川県横浜市 池田 智恵子

鉄棒で一心に逆上りを練習する子は父に見守られながら失敗しては挑戦をくり返している。空には月も浮かんで共に励ましているようだ。和やかな情景が淡彩の絵のよ
うに歌いとられている。(村岡)

梵鐘の残響うるむ芽起しの小雨に煙る吉備の里山

岡山県岡山市 坂東 玲子

季節感と情景のおのずと融け合った一首。聴覚と視覚を巧みにつなげて、洗練された調べが心やすらぐ情調をかもし出している。(山田)

マンドリンを弾ける女のスカートの襞やはらかに脚を組みたり

愛知県名古屋市長 清水 良郎

印象派の画家の描いた女人像のよう。マンドリンはセルロイド製の爪で弾くのだが、弾いている女性の優美なスタイルがそのまま目に見えるように歌われている。(村岡)

ゴミを食ふ鳥に名前問ひたればグアア愚我鴉と俺を無視する

愛知県名古屋市 犬飼 亮介

機知に富んだ一首である。賢い鳥だといわれる鴉が人間をあしらう情景を、巧みなオノマトペを織り込みながら詠んでいる。(山田)

雪明り北の窓より届きゐて昆布を煮つつ雪国想ふ

神奈川県横浜市 豊島 葉子

降り積んだ雪に台所の北側の窓辺がほのかに明るく、北の海でとれた分厚な昆布を煮ているのでよい匂いの湯気が温くこもって懐かしい想いに満たされている。(村岡)

あぜ道のつちに埋もるる蒔のとう踏めば足裏を押し上ぐる春

東京都練馬区 小谷 むつ子

足裏の感覚で蒔のとうを詠んだところが興味深い。下の句の調べに、はずむようなリズム感とよろこびが感じられる。(山田)

横須賀ゆ征きて帰らぬ父の戦船沖を見て咲く浜茄子の花

秋田県八郎潟町 北嶋 日二美

出征したまま帰還できなかった父への挽歌が海辺に咲く浜茄子の花に託して歌われる。幼い日から父を想い続けていた私の心のように赤い花は父の乗った船を見送つて咲いているのだろう、と切い心情が歌われている。(村岡)

赤き灯の揺るる船より唄聞ゆ家路を急ぐ言問橋に

神奈川県厚木市 井上 勝朗

名も床しい「言問橋」にさしかかると川面をゆく船があり、点している灯影が川面に映っている。その船から聞こえてくる唄に心惹かれて歩を緩めた、と江戸情緒の残る場面を巧みに捉えている。(村岡)

今朝もまた残月見えるバス停で夜を溶かした缶コーヒー飲む

埼玉県春日部市 宇田川 直孝

日常の何気ないひとときを詠んだ一首だが、残月と対比させつつ「夜を溶かした缶コーヒー」という捉え方が効いている。(山田)

月籠つじもりの夜は河太郎がたろうもさびしきや「カーン」と淵より泣き声聞こゆ

山口県光市 瀬戸内 光

河太郎は河童の異称という。不可思議な淵の雰囲気の中に、河太郎のさびしさが詠み込まれ、心惹かれる作品に仕上がっている。(山田)

遠き日の麦穂菜の花過ぐる風聴き立ちますや山上の歌碑

神奈川県藤沢市 水越 沢子

結句の「山上の歌碑」に問いかけている。麦の穂も菜の花も吹く風も、歌びとがふるさとを偲ぶ思い草としたものばかり。弘法山に立つ歌碑をこの地に生まれた歌人夕暮そのもの、と観ていることがわかる。(村岡)

杓子菜しやくしなの漬もの姉より送らるるほのかに秩父の土の香添へて

神奈川県相模原市 彦久保 長治

何気ない一首であるが、下の句にひそやかな郷愁が織り込まれ、秩父の山里の風景がほのかに浮かぶような味わいがある。(山田)

眼鏡かけメガネを探すラビリンス私^がわたしでなくなる瞬間

東京都武蔵野市 本田 いづみ

ふと迷路に迷い込むような「私」という感覚の奇妙な希薄さが捉えられている。口語体の軽い詠み方が生かされた一首。(山田)

堅魚木の丸き木口は金に輝り春雨烟る伊勢の新宮

神奈川県厚木市 大谷 重良

「堅魚木（かつおぎ）」は、神社本殿の棟木の上に鯉節に似た円柱状の木を横に並べたもの。伊勢神宮の遷宮祭の神々しさを象徴させ、春雨のけふる中でもくつきりと目に映ると祝歌を捧げている。(村岡)

投稿作品

髪を切りかけしパーマの帰りには寒中なるも冠らぬ帽子

東京都世田谷区

後藤 やす子

早春の千倉に摘みし水仙の香りの束を仏に供ふ

神奈川県海老名市

浜元 さざ波

青春の恋の花びら水無の川面に流れ四半世紀過ぐ

東京都大田区

望月 貴司

さくら舞う十三会も我ひとり伸び立つ孫に元気いただく

神奈川県秦野市

岡田 正子

空高く綿雲流る涼やかに川音たおやか風の吊り橋

神奈川県秦野市

宮崎 忠男

水面には吉野桜の花筏風はないかたに吹かれて穩ゆる穩ゆる流る

神奈川県秦野市

宮崎 雅子

朧月川の水面を渡る風八重の桜が艶あでやかに舞う

神奈川県秦野市

西方 テイ

子と登り夫とのぼりし阿夫利嶺をすつぼりと入れ秋の虹たつ

神奈川県厚木市

関野 喜代子

桜散り、片づく頃の薄青葉 “ここからだよ” と、さやさや光る

神奈川県秦野市

舘岡 文

老き母のそばに寄り添う小みかんがときのゆくままさらにちいさく

神奈川県秦野市

鹿島 正枝

今日もまた独り暮らしの我のため気遣ひくれし吾娘や友垣

神奈川県秦野市 三原 ミヨ

料理する夫の背中に抱きついて温もり確む 明日は月曜

神奈川県川崎市 松浦 元子

引きぎはも大事と妻の言ひくれきアイロン台を片寄せにつつ

神奈川県秦野市 細井 誠治

赤き灯の揺るる船より唄聞ゆ家路を急ぐ言問橋に

神奈川県厚木市 井上 勝朗

同窓の集い重ねて三十余いつしか傘寿祝となつて

神奈川県秦野市 伊東 久

三日月と明けの明星より添いて紫紺の空に睦みてありし

東京都狛江市 天野 まゆみ

木枯しの裸木ゆするこの夕べ丹沢山塊蹴ぐろと見ゆ

神奈川県横浜市 萩原 伸

朝ごとに色変わりゆくクロトンの並み立つ道は海辺へつづく

福岡県福岡市 六月朔日光

起抜けに割烹着つけし日々ありてつけぬ暮しの十年を過ぐ

神奈川県横浜市 池田 佳子

太古より変わらぬ里の地に立ちて生かされている不思議を想ふ

佐賀県唐津市 古賀 由美子

子育ての時は過ぐれどブラームスの子守唄弾く春雨の午後

神奈川県綾瀬市

鈴木りえ

無造作に土つき野菜が並べられ無人売場の春は百円

熊本県八代市

貝田ひでを

今宵またカンパネルラを探す旅サザンクロスの駅に降り立つ

兵庫県明石市

種田淑子

土起こすどこから来たか鳥の群れ春の訪れ餌に求めて

愛媛県松山市

宇都宮千端子

羽搏いて飛び立つ如し春キャベツ生き生きとして厨辺にあり

神奈川県秦野市

細谷幸子

月出ずる青き山影雪を消し今一度の恋とはならむ

神奈川県秦野市

小泉隆之

ふる里の閉校跡を訪れば竹馬のおとすの友の俤うかぶ

神奈川県秦野市

高橋賢二郎

五回目の午年迎えしみじみと孔子の教えに耳は順じがう

神奈川県茅ヶ崎市

矢嶋望

阿夫利嶺に向かえば黒き農鳥の鮮やく見ゆ春近きかも

神奈川県横浜市

綿貫昭三

春立つや海を見に行くバス乗れば今だに呻きし波の怒濤

高知県須崎市

野中泰佑

胸に手をあてがひて聞くわが鼓動リズムは確と一日はじまる

群馬県伊勢崎市

木村 あい子

霧を来てわが手に命預けたる蜻蛉と同じ体温にゐる

千葉県市川市

大河内 卓之

六人の子を育てたる父母の墓訪へば野鳥のにぎにぎとして

宮城県仙台市

畠山 みな子

行徳の駅前伸びる樟に五百千羽と椋鳥ひよどり囀かしまし

千葉県市川市

秋山 典子

春雨に花びら落ちるぬれた道見上げていれば肩に一花

神奈川県横浜市

佐々木 美智子

むしゃくしゃを菜の花台でバカヤロー届かぬ声を富士に向つて

静岡県裾野市

野口 清司

どよめきは捕虜の兵らへむけた罵声なり あゝ二十一年の天長節の
日

神奈川県秦野市

黒澤 満江

丹沢の峰縁豊み盆地から荷を背をひては故に歩戻りて

神奈川県秦野市

塩澤 敏子

雷雲の雨しとしとと今日も降り蛙ケロケロ田の水辺にも

神奈川県秦野市

長岡 久子

ひと昔ならば無けむに八十路すぐ吾が家長の喪の席に居る

福島県喜多方市

秋山 和子

帰へろ帰へろ蟄蛙集ふ震生湖秦野の再生みちのくへ届け

北海道小樽市

高本 智宏

乗り換えの電車待つこと五十分無人の駅の花見楽しむ

長野県伊那市

市川 光男

榎木負ひひと歩ひと歩の杣道を石^つ露の花々除けつつ下る

山口県宇部市

藤井 重行

圧^おしてくる丹沢山に真向かいて押し返し描く空気遠近法

神奈川県平塚市

増田 忠廣

古屋とは修理ばかりの金喰虫老軀もリフォーム出来ればよきに

岡山県岡山市

松元 慶子

夕暮れの藍の深みに向かふやうな無人のバスに心は乗せやる

和歌山県和歌山市

松本 礼子

行きずりの乙女の香り芳しくばばの心をほんわりつつむ

神奈川県横浜市

武市 治子

夕焼けに抱く幼き頃思い涙こぼれて帰える道のり

東京都町田市

若槻 泰治

蓑を着て草取りせし日の母を恋う雨の田んぼのほのかな匂い

高知県高知市

竹村 正信

朝闇のとばりをはらふ寒鴉ふた鳴きしおへ白む冬空

長野県駒ヶ根市

小林 恒夫

いいときもわるいときもみな私最近それがわかってきたよ

埼玉県入間市

大野 美波

コンビニも商店もなき「寄」^{やどりぎ}は息子一家の楽園の里

静岡県熱海市

吉田 森人

指しやぶり眠る弟にベビー毛布引きずりてくる兄も幼し

千葉県船橋市

渡辺 千代

肩にのせポーズを決める親子づれ冬日の空が縦に伸びけり

神奈川県秦野市

草刈 敏文

遠き日の麦穂菜の花過ぐる風聴き立ちますや山上の歌碑

神奈川県藤沢市

水越 沢子

耳ふさぐ仕草にゆれるパンジーに身のひとり言葉のつづきて

神奈川県横浜市

伊勢田 英雄

恙なく今日の日もあれ老いわれの習ひとなりし雨戸繰る朝

福岡県みやま市

西村 嘉彦

爆音を敵機かと思し丹沢を幾峰^{いくみね}か登りて傘寿迎えぬ

神奈川県秦野市

高橋 昌子

赤卵コツンと割れば濃き黄身のカロテンらしきが阿る顔す

千葉県流山市

末廣 照子

夕さればねぐらに帰りて椋鳥の榊の繁み団らん騒がし

神奈川県座間市

蓮見 孝子

齒科医師の肩にやさしくふれもせば何やらそわそわ予約まつ日日

千葉県柏市 末田 裕子

親子かな甘えるしぐさ小雀の口寄せねだる吹くは春風

大阪府寝屋川市 平岩 照美

大雪の街の中ゆく人らのズブズブと長靴の音ひびきておりぬ

埼玉県所沢市 川合 正次

あかときに吐く息白き三日月の天裂かんとて刃鋭し

神奈川県葉山町 中川 健二

生業の厳しく趣味に終はれども作家の夢は時にうづきぬ

山形県鶴岡市 大沼 二三枝

夕暮に空しく聞こゆ陽気なる植木等の『スーダラ節』が

静岡県焼津市 山梨 明彦

思いまた回り続けて夕暮の流れ続けて偲ぶふる里

神奈川県湯河原町 松野 守利

寒暖の日々につかれてこの道にたたずめば桜わずかに香る

神奈川県横浜市 中原 智恵

雪明り北の窓より届きゐて昆布を煮つつ雪国想ふ

神奈川県横浜市 豊島 葉子

江ノ電の窓より入りて雲水の草鞋の指にも陽はふりこぼす

神奈川県秦野市 遠藤 伸枝

春空の下に曇天渦巻きて龍が降り立つ法堂はっぽうどうの妙

京都府京都市 後藤 正樹

背後よりつと若き娘むすめに追ひ抜かれたちまち街は春の風ふく

神奈川県秦野市 福島 健太郎

白雲や喜ぶ子らの蓐狩り富士峰仰ぐ赤赤あかあか靨えくぼ

神奈川県秦野市 長岡 広文

口笛を吹けば駆け出す馬の背にこぼれる春の光を見たり

神奈川県厚木市 北村 純一

山がはの扉もしかと閉ぢたるに梅のかをりはいづくより入る

広島県広島市 熊谷 純

尋ぬれば風に逆らう一輪の会いたかつたとまた首を振る

神奈川県平塚市 和田 音次郎

斑ふたばを持ちて鉢にかたくり芽を出せり去年こぞより増えて二所ふたところより

埼玉県所沢市 榎島 茂

夕暮の歌口ずさむ花の下君わが妻となりし四月よ

神奈川県平塚市 升水 昭夫

しあわせは揃って逃げていくものですよ箸から逃げた豆がつぶやく

神奈川県中井町 竹 和世

木蓮の蕾は揃って天をさしきれいに咲くと宣言してる

神奈川県中井町 笹尾 雅美

相模なる阿夫利の山の頂きで沖の波間に君の顔見ゆ

神奈川県開成町 倉林 弘行

ペンネームで投稿したのはそれなりの理由を聞かずに十年過ぎぬ

神奈川県秦野市 小室 恵子

こぼれ萩みずかさ水量減りし水無の川清流となり白雲うつす

神奈川県秦野市 多田 ユキ江

電車待つ彼方の山に虹の生れつつがなき旅自づ祈りぬ

千葉県松戸市 佐藤 繁子

夕鳥遊び惚けて高き屋で春を楽しむ風情嬉しき

神奈川県横須賀市 松方 尚義

灌木を根こそぎ掃ふボランテイヤ黒土目覚め鋤初めを待つ

神奈川県海老名市 滝沢 章

江ノ電が市電の如く走る街若芽の香り光る腰越

神奈川県藤沢市 石渡 裕司

記録的雪の山なみてんくう天空にそばだつ威容丹沢アルプス

神奈川県秦野市 飯田 千栄子

いつか讀む野上全集巡り来て作中に入り戻るを楽しむ

神奈川県秦野市 大澤 智恵子

たからづか oh' 宝塚百年の華やぎを観る大階段に

宮城県仙台市 阿部 堅市

春の朝風ふきわたる並木道ふかく色づく通りのさくら

神奈川県相模原市 関 恒星

柚子の毬湯壺にはまり浮き沈む五音七音リズムをとぼし

茨城県龍ヶ崎市 杉山 由枝

妻逝きてより豆蒔はせざりしに在りし日おもふ鯛を焼けば

福島県田村市 青木 新一

憧れゐし学生時代の恩師より五十年ぶりの便りときめきの文字

埼玉県所沢市 嶋田 天津子

読書こそ吾が人生の最高の趣味だと思ひ毎日本読む

山梨県笛吹市 植松 正幸

阿夫利嶺に抱かれ生き来し八十年鎮守の里の原風景いずこ

神奈川県秦野市 熊坂 和枝

三十年前録画せし吾が授業「山月記」読む声の艶はも

神奈川県秦野市 河合 聖

夕暮の空に真近し丹沢の連なる西に富士の影立つ

神奈川県秦野市 天田 徳子

丹沢の雪に冷えしるき菜園に菜花を摘みて夕餉に添へぬ

神奈川県秦野市 安居院 輝雄

老いの身を出さずに子等を想い居る母のつぶやき今しみじみと

神奈川県中井町 高橋 和子

葉月越ゆ声細かりしひぐらしやうらさびしかり人ゆゑにこそ

東京都墨田区 田中 勝

しぶき立て閑伽桶みたす山の水痺るるほどの冷たさなりき

神奈川県川崎市 石井 弥栄子

朝霧高原の放牧牛の瞳の先に富士はあくまで蒼天に立つ

神奈川県伊勢原市 山田 ゆたか

縄文人のわが地に住みしと知りてより土に触るれば日々になつかし

神奈川県伊勢原市 増井 智子

七草は米ではとても手に入らず一草で茶粥に卵とじこむ

アメリカ 黒田 素子

放課後羽根を伸ばしてスポーツとサッカー野球入り乱れつつ

岡山県岡山市 佐藤 邦夫

母さん螢見に行きますか行きますしょうきつと来ますよ兄さん螢

茨城県下妻市 篠崎 順子

手術終え窓越し向きあう丹沢山強く生きよとこだまがひびく

神奈川県秦野市 安藤 和雄

カナメモチ色鮮やかに芽吹く頃初夏の匂ひの風流れ来ぬ

群馬県太田市 小林 準

冬茹子なべすしの香信住む山家矢倉沢みち畑拓くひと

神奈川県横浜市 川口 力

神さびて夕影の中丹沢の峰々眠る雪の降る日

神奈川県秦野市 二瓶 和子

朝々に香りたたせて中国茶あなたのことを知りたいと思う

千葉県市川市 黒田 純子

雪を積む山を従へ立つ富士に抗ふごとく風雲かぜぐもの湧く

神奈川県開成町 諸星 末子

弘法山視ればたちまち甦るあの花あの人あの頃のわたし

東京都板橋区 岩崎 幸子

ふんばりてぴつたりと合ふ目の高さ脇を支ふるわが膝に立ち

埼玉県幸手市 正原 久美子

しつかりとひらがな文字の絵日記に未来の君は宇宙飛行士

神奈川県横須賀市 田浦 美江

神様が掃除した秋の空飛行機雲が一の字描く

東京都八王子市 岡部 美穂

八十を越えて失ふものはなし腹の底より詩吟をうたふ

神奈川県秦野市 高橋 シゲ子

老いの身に愛犬散歩福の神

神奈川県秦野市 飯野 喜代

墓地を買うために働いて来たようと香上げながらしのぶ弟

神奈川県茅ヶ崎市 白井 東生

大雪で傷みし庭も色づきて背抜き手袋赤を選びつ

千葉県習志野市 田久保 弘志

夕暮れぬ故人偲びる蘇へる移りゐる今悼み深めぬ

神奈川県逗子市 小畑 千代子

風さそふ螢袋の花の筒ふぶ含みゆきませ吾が鬱ごころ

神奈川県秦野市 高野 つや子

椿のくち松葉のまなこの雪だるまは二十たち才男孫は園児にかへる

神奈川県座間市 波多野 綾子

さ庭辺の牡丹のつぼみ膨らむを朝な夕なに数へ眺むる

神奈川県伊勢原市 小林 啓子

おば逝きて集いしいとこ話弾むおばの昇天皆の心に

神奈川県秦野市 高橋 智英子

桜咲き散るまで何も手につかずただうたかたの日々は過ぎゆく

神奈川県横浜市 栗田 尚美

辛いのは嫌だけれども辛いほど嬉しく思う人の優しさ

青森県五戸町 佐々木 優

愛娘の寝顔笑顔に満たされて夫婦そろってメタボリック

神奈川県秦野市 磯部 雄蔵

初孫の寝顔見る目を糸にして末は学者かオリンピックか

神奈川県秦野市 磯部 佑里子

金色の菜の花の海撫でてゆく風ののどけし山里の春

神奈川県秦野市

松本 瑞恵

投げ入れて炎一気に燃え上がるたたらむらけの里の村下の元で

神奈川県秦野市

三杉 幸子

残雪の山の上に浮く白熊は影を伴ひ東へ向かふ

神奈川県秦野市

鳥居 滝子

ジャレあつた去年に生まれし三匹の猫ら今宵は一匹になる

神奈川県秦野市

五十嵐 龍一

桃色の葉小さき口に消ゆ水を片手に行方追ふ母

神奈川県横浜市

佐藤 里志

黄帽子の園児の列はジグザグでゴツホ絵のやう菜花の街は

神奈川県秦野市

横溝 彰

午後五時の帰宅促す「夕焼け小焼け」にまじるや亡き子の「ただいま」の声

東京都町田市

栗本 るみ

サービスもセルフが付けば地獄みる全て自分の命令と化す

東京都足立区

佐藤 春夫

パンがないお店スカスカがっかりと閉じ込められる大雪の日々

神奈川県座間市

中村 奈帆美

咲くもよし散るもよろしき桜花子に残したき言葉したたむ

神奈川県秦野市

田村 幸子

夕暮れを友と見入りてきれいだね共にスマフォで写して離郷

茨城県常陸太田市 鴨志田 佳奈

日課なる朝の散歩で日頃会う路地のタンポポシヤンと顔上げ

神奈川県秦野市 清野 道郎

目を病みて聴くなりたる吾が耳に春の小鳥の声の入り来る

和歌山県和歌山市 松田 容典

車椅子の母を押しながら月山の春を捜しに駆けていきたい

山形県西川町 和泉 れい子

乳にほふ児の髪撫づる母の手に永久を誓ひし指輪ツンが光る

宮城県角田市 高橋 美枝子

こんなにも美はしき夕陽がありしかと義母は施設の窓によるこぶ

茨城県常陸大宮市 小田倉 量平

株価の直近終値を分析して今後の動向知る手掛となる

静岡県裾野市 川崎 一成

梵鐘の残響うるむ芽起しの小雨に煙る吉備の里山

岡山県岡山市 坂東 玲子

生たまご背でつぶれしと日記あり明治をしのぶ大山詣で

茨城県鹿嶋市 織田 臣子

やわらかき春の陽ざしのひだまりにうつらうつらと猫と微睡まどろむ

神奈川県秦野市 佐藤 和子

沖繩で散りしおじさん思ふなりモーグル選手の額の日の丸

静岡県磐田市

坂部 哲之

君と会った秋の夕暮れ子は二十才我れは五十路としみじみ思う

茨城県常陸太田市

鴨志田 祐一

ブルーのセーターに合うスカートを決めかねてセールを謳う店はし
ごする

神奈川県鎌倉市

重岡 穂子

身を七七部跳ね返らせて春の鯉シンクロナイズ真似ておりたり

愛知県豊田市

青山 桂一

ひまわりの黄の鮮烈に魅せられて風纏いつつ今歌を詠む

大阪府伊丹市

吉田 ひさえ

脚二つ下げてぞ夏野のあしながや脚長蜂としそをして連るがで

愛知県設楽町

関谷 道雄

冬に見る木には顔あり小さき目がおどけていたり葉痕ときく

東京都世田谷区

遠藤 愛子

床の間に堅き蕾の桃の枝を活けて待つなり春の光りを

石川県かほく市

室田 豊

あぜ道のつちに埋もるる露のとう踏みば足裏を押し上ぐる春

東京都練馬区

小谷 むつ子

今朝もまた残月見えるバス停で夜を溶かした缶コーヒー飲む

埼玉県春日部市

宇田川 直孝

一枚だけ襲^{かさね}の衣足らざるか由布岳の裾地肌をさらす

大分県大分市 津野 律餘

宙^{そら}と時越えてゆきたしマイカーは雪降る丘をひた走りつつ

神奈川県秦野市 近藤 千恵子

洋^{よう}琴^{きん}の黒屋根に映る緋^ひ毛氈^{もうせん}モーターアルトはわたしの「かなし」

北海道札幌市 酒井 かをり

婚期すぎし子の残業を待つ部屋に芽を出すジャガ芋ふたつ転がる

青森県青森市 齊藤 守

安物の桜の匂ひ朗らかに生きよと軽く言ってくれるな

埼玉県さいたま市 志田 明音

玄関に煤けた貝雛飾る今日たまゆら作る露味噌うまし

東京都狛江市 田村 智恵子

今生の世のからくりに取り憑かれ そのことさえも老いて忘れる

京都府京都市 吉川 太郎

骨埋むと言ひ居し台湾敗戦に追われし父の墓所雪は積む

神奈川県秦野市 池田 せつ子

ジュツと音立て海に入る太陽のフーツと声が聞こえたる時

北海道恵庭市 小田 虎賢

ひまはりの名画はゴッホ向日葵の名歌は夕暮名句を知らず

東京都杉並区 庭野 治男

古城訪はんと廻りゆくロワールの木々の芽吹きの淡き彩り

神奈川県綾瀬市

西本 幸三

暮れてゆく今日一日を振り返りまだやさしさの足りぬ身を恥ず

兵庫県明石市

小田 慶喜

子育ての思ひ出我が子ふたり抱き沈む夕日に歌贈りし日

兵庫県明石市

小田 和子

あのでかき夕日に向かひ自転車を漕げば我が身の染まりたる赤

京都府京都市

小田 龍聖

雪折れの枝ささくれし口開けて桜の落花を食みつこぼしつ

神奈川県鎌倉市

鈴木 栄次

抱卵の鳩へ数羽のカラスきて囲みだしたり無言のままに

茨城県鹿嶋市

栗崎 佳星

さくら散る追いかけるようにひらひらと散らねばならぬかのように散る

愛知県名古屋市

木村 恒

身も財もすべてひき算老い暮し遺すたし算笑顔の絆

神奈川県横須賀市

梅澤 育子

花冷えの雲カットするビルの街離れ住む君この空の下

神奈川県横須賀市

梅澤 里帆

夕暮の田の畦にゐる遠近跳ぶ手の平に載る小さき蛙

鹿児島県屋久島町

上田 笑子

赤目高蓮の葉つばの切れ目から顔を突き出し水上を見る

三重県名張市 相川 高宏

車いすの人ら満開の桜の下に集ひてゐたり花びらの降る

千葉県習志野市 藤野 宏子

靴擦れを庇いながらも地図を手に夕暮の歌碑五か所を巡る

神奈川県秦野市 柳川 維

そそくさと自動改札タッチして今日の始まりいづこに消えん

千葉県幕張町 安藤 誠子

心足らへる生でありしかこれよりの道程寿ぎ短歌詠み継がむ

神奈川県秦野市 志村 良江

母がいる丘を越えると母がいる蒲団をめくり足より目覚む

千葉県市川市 山本 明

窓の辺に囀る小鳥の声聴きつ職退くあしたはまたまどろみぬ

神奈川県伊勢原市 黄金井 春男

完成の螺旋道路に囲まれて枝垂桜は群青を降る

神奈川県相模原市 荒井 篤

侘助に顔を埋めしひよどりがけふは大輪の花片を食む

千葉県茂原市 森 八重子

戸口にて喧嘩し合つてじゃれ合つて幼き兄弟母待つ夕暮

大阪府豊中市 今野 沙弓

夢なかば俳句の道は茅の中思いは馳せる病の兄に

神奈川県秦野市

石田 シメ子

痩せ細り池に溺れて息絶えし狸の墓になみだあめふる

神奈川県秦野市

伊藤 壱

晴れ空に舞う風花は冬の日のひかりのなかにあわくとけゆく

神奈川県大磯町

元植 芙美子

万葉の歌碑に出会し足柄峠いにしへ偲ぶ夫とともに

神奈川県開成町

田中 道子

一夜明け近所総出の雪搔きに陽光あまねしこのコミュニティ

埼玉県狭山市

堀田 嘉一郎

キャンバスをかつぎ出掛けし御嶽山絵だけが残り貴女はいない

愛知県名古屋市

朝日 歳子

たぎつ瀬を逆上りゆく鯉の稚魚あまたが黒き群としなりて

神奈川県平塚市

緇荘 悌嗣

花の雨池に舞い散り筋となり形かえつつ岸へと寄せる

神奈川県秦野市

番匠 千津子

遅しく女子ら漕ぎおる自転車群流れ行く学生の町に

神奈川県秦野市

木津 倫代

歩くたびポツケの魔法がコトコトと私の今日の動きをささやく

福島県いわき市

伊藤 保次

やわらかな日差しを浴びし干し物をたためば春の香りほんのり

愛知県名古屋市中島正義

風光る権現山に桜咲き少女の笑みに花びらは舞ふ

神奈川県海老名市井上真吉

遠見せし富士山父に連れられて麓に見れば初夏の空つく

東京都練馬区高橋美寿子

降り止まぬ雪を眺めて日が暮れぬ疎開の年も豪雪なりし

東京都町田市中川みつ子

ひまわりの花に囲まれ太陽を想う生きると叫ぶ黄金色なり

神奈川県相模原市及川文子

バス停で出会った人の名が出ない知ったふりして話が弾む

愛知県名古屋市中出厚子

名水のふるさと秦野たづねる日われは八十の娘となりて

埼玉県狭山市山口幸代

大銀杏眩しきまでに落葉して声なき堂塔影うすめたり

神奈川県相模原市白川義人

水死せる吾子が背負ひしランドセル土用がくれば虫干しをする

神奈川県相模原市横松光子

咲き誇る桜の奥に顔を出す細き月にぞ心が揺れて

神奈川県平塚市保坂米蔵

夢のこと現のことと入り混じり怒り怖るる義母をかなしむ

神奈川県相模原市 歌代 宇多利

幾日もやせ地たがやしまいた牛蒡水やる手にも力がこもる

オーストラリア バンアーキン哲子

秦野にも水ぬるむ春のおとずれんそつとすくいし流るる花びら

オーストラリア 新ヶ江 英子

瀬戸内に春を告げるかいかなの網におどるや銀色の帯

オーストラリア 木下 弘文

雲上にすつくと突き出た黒富士よ裾野とことなり孤高の姿

オーストラリア 木下 佳代子

二十代にプレゼントされし「広辞苑」父の気持ちに今にして思う

東京都町田市 丸岡 花子

横須賀ゆ征きて帰らぬ父の戦船沖を見て咲く浜茄子の花

秋田県八郎潟町 北嶋 日二美

古着屋で個性見つけて買ってみる誰かの過去を引き継ぐつもりで

愛知県愛西市 横井 和幸

筍が土を突き上げ力強く夏の始めの駆となる

静岡県裾野市 川崎 紫紅

あらしひの種を手に乗せこの星に傷口つけて向日葵を蒔く

愛知県愛西市 横井 正男

正座なし割烹衣はずして箸を取る大和撫子まだここに在り

東京都板橋区

渡邊 彌生

月籠つこもりの夜は河太郎がたろうもさびしきや「カーン」と淵より泣き声聞こゆ

山口県光市

瀬戸内 光

昔日の企業戦士ら口々に持病を誇る勲章のごと

神奈川県座間市

田中 洋一

ガラス越しふと現わし猫の影傾げる首は影絵見るよう

愛知県名古屋市

中山 郁雄

てのひらに花ビラのせて孫たちと桜舞い散る春を遊びぬ

神奈川県秦野市

高橋 君子

また届く友の訃報に言葉なく桜ちるちる桜ちるちる

神奈川県秦野市

落合 義行

無機質のアスファルトの上にふり注ぐ桜吹雪よ生命いのち与えて

神奈川県秦野市

東江 文香

すこやかにお過ごしですか初恋の君の面影少年のまま

愛知県江南市

嘉村 蔦子

雪どけ水奔る川面も岸の辺もさざめくごときぎんのひといろ

山口県岩国市

木村 桂子

果てをしらず無韻の夜空狂おしく雪は闇を舞い寂寥を積む

茨城県古河市

立石 和正

草笛でイマジンを吹く君想うあの河川敷のあの夕暮

兵庫県神戸市

岸野 孝彦

ゴミを食ふ鳥に名前問ひたればグアア愚我鴉と俺を無視する

愛知県名古屋

犬飼 亮介

駐車場に桜吹雪の舞おりて発ちし車の轍のしるき

神奈川県秦野市

諸星 セツ

里山に名残り惜しむか夜桜の水面に落ちる上弦の月

神奈川県秦野市

高橋 一美

手本みせ親は叱りて子は泣きぬブランコ揺れてる 四月の公園

神奈川県秦野市

山口 国男

朝の陽に長く伸びたる人の影振る手先はわれに届きぬ

オーストラリア

高山 征三

今日もまたみずみずしい豆もぎとつた母もこうして暮していたのか

オーストラリア

高山 昭子

本を読む君の横顔に恋の蝶ふわりと留まり羽を休める

神奈川県秦野市

山口 早春

二十三歳戦死の息よ世に見たる桜はいつくいかなる桜

兵庫県小野市

藤木 千恵子

マンドリンを弾ける女のスカートの襜やはらかに脚を組みたり

愛知県名古屋市

清水 良郎

夕暮の写真の面輪父に似て明治の男の気骨醸しぬ

神奈川県秦野市

新名 安佐子

隣りから我が家の畑へ一面の菜の花傾れは湖まで降りる

長崎県諫早市

江越 國弘

犬も猫も命終あれば飼いがたし耐えてゆかなんひとりの余生

東京都町田市

飯田 世津子

貧しさが澄むまづしさでありし日のお地藏さまの笠に積む雪

秋田県秋田市

渡辺 夏子

七夕の心捜しに街に出づされど風のみ君何処かな

新潟県長岡市

安木沢 修風

母好みし形見の袖をブラウスにリフォームすれば匂い残れり

神奈川県茅ヶ崎市

淵上 朱美

鯉のぼり舳先に立てる診療船船長室に赤子寝てゐる

神奈川県小田原市

藤田 顕英

五百円玉を落として気づかないわれに追いつく赤ランドセル

神奈川県川崎市

大平 真理子

昂ぶれば遠くに抛る妻の杖そい寝のわれの夜着なおしおり

神奈川県秦野市

植田 欣也

迷い子も慕い来るなり我妻を幼き身にも人の分かるか

神奈川県平塚市

平澤 克則

木々の葉の薫る風あび水無川の空ゆくがごと吊り橋わたる

神奈川県厚木市 小菅 建夫

堅魚木の丸き木口は金に輝り春雨烟る伊勢の新宮

神奈川県厚木市 大谷 重良

梵鐘を戦に供出したる日の母に抱かれし二歳の写真

神奈川県横浜市 江夏 由以子

ITの革命進む新世紀風流忘れ脳錆びゆくか

沖縄県宜野湾市 多良間 典男

朝日受けクレーンの高さ先端は輝きながら資材を運ぶ

愛知県名古屋市 原田 勝子

杓子菜の漬もの姉より送らるるほのかに秩父の土の香添へて

神奈川県相模原市 彦久保 長治

風渡る秦野里山新緑のただひたすらに古墳静もる

神奈川県横浜市 増田 由紀子

眼鏡かけメガネを探すラビリンズ私がわたしでなくなる瞬間

東京都武蔵野市 本田 いづみ

長き髪ゆらして少女は丘の上 ふぶく万の桜メルヘンとなる

神奈川県伊勢原市 門 久仁子

飽食の時代に在るも食欲はわかず自前の梅干を愛づ

神奈川県秦野市 中村 かつ子

今日はまた昨日とちがう風吹きて大夕焼けに燃える丹沢

神奈川県秦野市

小林 仁子

花吹雪両手に受けて老い深しあと幾度の花の巡りか

神奈川県秦野市

加藤 三朗

月日経て目鼻もおぼろの石仏に桜はしきりにはなびら散らす

神奈川県秦野市

石原 次子

生と死を恋と詩歌を語りたり女五人の中伊豆の宿

神奈川県秦野市

奥津 恵美子

庇から湯気を引き裂き雨だれの落つる露天で静かな朝湯

東京都世田谷区

橋本 亮二

山里の細き水路をゆく水の絶ゆることなき密やかな音

神奈川県秦野市

内田 禧子

街路樹のまつ赤な芽ぶき櫛の木を包み込むごとく花吹雪舞う

愛知県名古屋市

大脇 加代子

石垣にたつなみ草が踊り出し門を開ければ紫の波

千葉県流山市

藤島 總江

寝るは楽風呂は極楽亡き夫の言葉息づく 暮るる窓辺に

愛知県名古屋市

植村 まさ

朝三時上毛山山動かして高速とばせし孫待つ秦野

群馬県吉岡町

宮崎 はつ江

春だから隠した上衣脱いじゃへばづんぐりむつくり笑いの涙

愛知県名古屋市 加藤 文

ひな祭りデイの昼餉はスパゲツテイ口元染めつつ笑い合う老は

東京都町田市 亀井 恵子

めくるめく光彩放ち沈みゆく夕日に遇へり旅の終りに

神奈川県伊勢原市 小島 きみ子

青空に一すじ長く雲描きどこへ行くのかあの飛行機は

愛知県名古屋市 西村 節子

コンビニの扉開くたび匂いくる煮汁に浸る定番の品品

愛知県名古屋市 山中 茂代

融けるのを見ているだけのジレンマへアイス頭痛は僕を嘲笑う

東京都武蔵野市 本田 隆道

まだ朝の光も知らぬ初雪を水に還した君のてのひら

三重県四日市市 伊藤 里奈

元永の臨書に緊まりゆく春よ仕事に追はれ漸く筆持ち

神奈川県横浜市 高橋 律子

バス停のコンクリートの隙間にも日ならず咲かむたんぽぽの花

岡山県岡山市 信安 淳子

廃校の体育館に灯がともり牛飼ひ集ひバドミントンする

北海道札幌市 藤林 正則

嗚呼君はいずこに住みいむ追憶の中に乙女のままにとどまる

神奈川県相模原市 日下 玄

空っぽな心を埋める自販機の珈琲一缶癒しの温もり

東京都武蔵野市 本田 しおん

めずらしく君にさそわれ桜散る川辺を歩み共に吹かるゝ

神奈川県秦野市 室伏 とし子

東北の津波の映像見るたびに重なる思いは吾の青春

愛知県名古屋市 今枝 久子

江上こうじょうに春めぐり来て黄花こうか敷く北に筑波嶺西に富士山

千葉県流山市 伊藤 谷上

昏睡のままに二とせ逝きし母「はな」は母の名 朝ドラヒロイン

静岡県浜松市 村松 俊幸

花好きを花で埋めてこもごもに人生の蓋に釘打ちつけぬ

神奈川県秦野市 八木 実

春の水とどめかねたる水無瀬川やがて白昼のまぼろしへゆく

神奈川県伊勢原市 高橋 佑希

抜けたれば戻る約束漆黒の天城隧道風押しすすむ

神奈川県秦野市 大島 初江

一晚の雪は金柑撓めたりはらいし指に鮮血のにじむ

神奈川県山北町 杉本 直彦

理数より小説読めば思い出す淡い思春期フォークダンスよ

愛知県豊田市 稲本直樹

秦野行我が師リハビリ桜舞う人格識見微動だにせず

埼玉県さいたま市川添 能夫

幾千の花たくわえし老木に息吹きかける春風の業

神奈川県横須賀市 渡辺 昭宏

月明の高麗山の尾根過ぎり行く猪親子なだりに消ゆる

神奈川県平塚市 上原 薫

先人に会える日までをいかに生く満開の桜ひと枝折りて

神奈川県南足柄市 鈴木 玲子

わが庭を飽かで訪ひ来るうぐひすのひもすがらゐて何を思ふや

静岡県三島市 鈴木 昭紀

鉄棒で逆上りする幼な児を見守る父と春の夜の月

神奈川県横浜市 池田 智恵子

雨上がりてつややかなりし春楡のかそけし葉音はわれをなだめむ

東京都世田谷区 恩田 紀子

看護士に囲まれし母はすっかりと主役になりて布袋様の笑み

東京都町田市 高橋 唯郎

咲き誇る桜並木は若人の群れ今日の九段は喜びの坂

神奈川県秦野市 稲葉 昌子

没つ陽の車窓まどに写りて走ること随まきくるさまに心ゆだぬる

神奈川県秦野市 杉山 頼子

富士山のとつぺん両手広げたら生まれて初めてお日様とハグ

奈良県葛城市 森本 成美

スカートをまあるく広げて散る花に囲まれるまで坐し君を待つ

兵庫県神戸市 辻本 和美

木漏れ日を駆け抜けていく少年の裸足に伝う夏の痛みや

東京都新宿区 大野 真季

転校時いろいろあつた孫だけどうれしや目出たき合格便り

神奈川県秦野市 牛島 千工子

薄紅のわび助雪にうつむきて凍てしこの朝春は名ばかり

神奈川県秦野市 松本 素子

長靴で重い足取り雪の道懐かしくなるじいちゃんの田植え

神奈川県秦野市 瀬戸 夢美

ふゆのあさつもればたのしゆきだるま

神奈川県秦野市 瀬戸 蒼音

第二十七回夕暮祭短歌大会

主催 秦野市・秦野市教育委員会
協力 秦野短歌会
後援 現代歌人協会

日本歌人クラブ
神奈川県歌人会
神奈川新聞社
株式会社テレビ神奈川（敬称略）

作品集

平成二十六年五月二十四日発行
編集・発行 秦野市立図書館
神奈川県秦野市平沢九十四番地の一
電話 〇四六三（八二七）〇一二

編集には慎重を期しておりますが、万一誤
字・脱字など不備がありましたらご容赦くだ
さい。

事務局

